

# プロフェッショナル監督の仕事に関する 社会学的研究

飯田 義明 (経済学部教授)、平田 大輔 (文学部教授)、李 宇ヨン (文学部教授)

## プロジェクト研究の目的

現代のプロサッカー界において監督は、勝敗という結果によって契約を遂行する前に解任されるような慢性的に不安定で脆弱な世界である。それゆえ、チームを勝利に導くためにあらゆる知識、経験知、コミュニケーション力などをフルに動員していると考えられる。しかし、これまでその仕事に関する実相については余り問われることがなかったと思われる(注1)。

コーチ学の分野ではこれまでコーチング法、トレーニング法(運動生理学的側面)、心理学を応用した集団競技などのチームビルディングなどを中心に指導現場への応用を目指した研究が蓄積されてきている。その一方で、図子は日本におけるコーチ学においてスポーツ社会学を応用したアプローチをする研究がほとんど無いことを指摘している(図子, 2010)。またスポーツ社会学の分野からも、コーチ学の主目的が指導法であることから、他者との関係性や制度の在り方に着目する研究の不在などが指摘されてきている(渡, 2020)。海外の動向に目を向けると、監督が持つ社会関係性を視野に入れた研究として、S.KellyがM・ウェーバーの権力論を背景にイングランドの監督について考察をしている(S.Kelly, 2017)。

そこで、本プロジェクトではKellyの研究を参照としつつ、日本における監督がJリーグ界の利害関係の中で、どのような関係性(選手、クラブ関係者、代理人、メディア、スポンサー企業、サポーター等)を構築(重視・意識)しながらチームを勝利に導き、結果を残そうとしているか。その仕事の実相について、リーグ監督経験者のインタビュー調査(質的研究)から検討することを目的としている。

## 研究方法・分析

調査にあたっては半構造化インタビュー法を用いた。この方法は協働性といった通常の会話の要素を含みつつ、一方では聞き手のインタビューが持ち込むサーケクエスションを中心に構成されている専門的会話としての側面を有しながら対象者との相互構築を目指す方法である(Holstein & Gubrium, 1995)。この方法を用いて得た音声(Zoom映像)データをすべてトランスクリプトしテキスト化した。そして、そのテキスト化されたデータを質的分析ソフトである

MAXQDA2020を利用して分析した。

本プロジェクトは専修大学スポーツ研究所の倫理審査委員会の承認を得ている。

## 本年度の調査状況

### 調査対象

本年度はコロナ禍が継続していることもあり、調査が当初の計画とは大幅に異なり難航した。当初の調査計画ではJリーグ監督経験者5名を予定していた。しかし、本人からの承認を得ることができたものの、依頼時に監督を行っていた者のなかではクラブからの承認が下りない監督もいた。そのような事情もあり、結果的に2名の監督(A, B)と、B監督の元で働いた1名の分析担当コーチ(C)、そして、1名の代理人(D)の4名であった。C, D氏は本プロジェクトにおける直接の調査対象者ではないが、監督とコーチの役割の違い、利害関係者である代理人との関係性の情報を補完するために行った。監督経験者(A, B氏)ともに1回目は直接お会いして話を伺った(共に約2時間程度)。その後の補完的な聞き取りはZoomを利用して行った。C, Dの両氏とはZoomによって行われた。

### 対象者のキャリア

#### A氏に関して

氏は関東のサッカー強豪大学を卒業後にJ1のクラブに入団し、1年目からレギュラー選手として活躍。その後、J2のクラブに移籍し選手として約10年間活躍する。指導者としてのキャリアは35才頃からであり、J1クラブのユースチーム監督としてスタートする。そして、J2のクラブで最初の監督を経験した後、J1クラブのヘッドコーチを3度、その後J2の3クラブ、J1の1クラブで監督を経験している。このキャリアのなかで、途中で解任されたのは1度であり、リーグ戦途中からの経験はしていない。

#### B氏に関して

氏は関東のサッカー強豪大学を卒業後に就職し、仕事をしながらJFLでプレーをする。つまり、選手としてはプロのサッカー選手としての経験はない。その後、プロの指導者(コーチ/監督)を目指して仕事を退職し、某大学の監督を2年間経験する。そこからJ2のクラブのコーチとしてスカウトされ、プロの指導者として職を得ることとなる。そして幾つかのクラブを移籍する中で、ヘッドコーチ、分析担当コーチ、育成ダイレクター、

ユース監督、強化部スタッフなど様々なセクションを経験し、J1クラブの監督に上り詰めることになる。解任後はJ2のクラブも経験している。

### テキスト分析の結果

二人の監督に至るまでのキャリアを比較すると全く異なると言える。A氏は、プロ選手としてのキャリアを10年有しており、監督を見る選手たちの厳しい視線もプロ選手を経験しているという認識になる。それに対して、B氏はある意味ではプロ選手を経験していない叩き上げの監督である。この違いに対しB氏は「どう、選手から信頼を得るかですよ」と述べ、どんな仕事をするときも「死ぬほどやってきた自負はある」と各仕事に対する時の真摯な姿勢により選手からの信頼を勝ち得てきたようである。また、結果的に様々なセクションを担当してきたことがチームをまとめ上げていくためにプラスになっていたようである。

テキスト化されたデータはMAXQDA2020を利用して分析した。そこから、「決定すること」「軸がブレないこと」「選手とのコミュニケーション」「フロントとの方向性」「メディア、代理人との関係性」などの5つのカテゴリーが引き出された。現在の日本代表監督である森保一氏も、著書で監督の仕事は「観ること」と「責任」を引き受けることだと述べており、今回の二人からもほぼ同様なことが述べられている。これまでも数名の監督から聞き取りをしており、現在それらを加えて分析中である。今後、本プロジェクトの結果に関してはフットボール学会での発表、専修大学スポーツ研究所紀要に投稿予定である。

注1) ジャーナリストによる国内外の成功監督によるバイオグラフィー的な書籍は数多くだされている。学術書としては、Sport in the Global Societyシリーズの1冊として出版されているNeil Carterによる英国プロサッカー監督史を詳細に検討した「The Football Manager: A History」などがある。

### 参考文献

- Holstein & Gubrium(1995) The Active Interview. Sage.
- Neil Carter(2006) The Football Manager: A History. Routledge.
- Seamus Kelly(2017) The Role of the Professional Football Manager. Routledge.
- 渡 正(2020) スポーツコーチングの社会学的研究の可能性. スポーツ社会学研究, 28(2), pp.27-41.
- 図子浩二(2010) スポーツ選手や指導者に役立つ実践の学としてのコーチング学の一つの方向性. コーチング学研究, 23(2), pp.99-104.

付記:本プロジェクトは、令和3年度専修大学スポーツ研究所プロジェクト研究の助成を受けたものである。